２０２５年１０月１９日　礼拝説教要旨
ヨハネによる福音書講解説教５７「良い羊飼い」
イザヤ５３：６～８、ヨハネ１０：１１～２１

羊は弱い動物の象徴のような存在です。前のところには盗人、強盗のことが言われました（１０節)。また今日のところには狼が出てきます（１２節)。これらは羊の命を脅かす存在です。そういう外敵に対して羊は全く無防備と言ってよいでしょう。加えて羊は迷いやすい動物と言われます。動物には帰巣（きそう）本能というのがあります。鳥は巣に帰ってくる。渡り鳥は何千キロと旅をして、また同じところに戻ってきます。魚もそうでしょう。海から川に帰ってくる。犬も飼い主のところに戻ってくることがあります。ところが羊はこの能力が発達していない。今日読みましたイザヤ書にも「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った」（５３：６）とあります。バラバラに散って行くイメージがあります。これは他でもないわたしたちのことです。人間は神さまのもとを離れ、迷い出ています。

神さまのもとを離れ、それでも生きていけると勘違いしているのがわたしたちです。創世記のアダムとエバの物語を思い出します。自分が神のようになろうと食べてはならない木の実を食べてしまう。神さまとの約束を破り楽園から出て行くことになりました。傲慢にも人間は神さま抜きに生きていけると思っているのです。そのようにして人間は、自ら羊飼いのもとを離れ、迷える子羊になりました。それが聖書の伝える「罪」の状態です。その罪が今のこの世界、わたしたちの現実となって現れているのではないでしょうか。人間は、神さまを忘れ、自分勝手に、自分の思うままに生きています。それがこの世界の混迷の一番の原因です。戦争や力による支配があります。差別や偏見があります。それに歯止めをかけるものがない。一度迷い出たら終わりなのです。しかも厄介なことに自分が迷っているという自覚がない。自分ではうまくやっている、頑張っていると思っている。そのまま突き進むのです。かつて日本は、そのようにして戦争に突き進んでいきました。けれどもその向かう先には破滅があります。死があります。わたしたちは神さまのもとに帰らなくてはなりません。そこに本来のわたしたちの生きるべき場所がある。生きるべき健やかな命があります。

けれども、わたしたちは迷いやすいのです。一度、迷い出たら戻って来ることができない。だからこそ、わたしたちが神さまのもとに帰ることができるように神さまはイエスさまをくださいました。イエスさまが羊飼いとなって迷い出たわたしたちを探し出し、神さまのところに連れ帰ってくださいます。そのためにイエスさまはご自身の命を捨てられました。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（１１節）それは何よりもこの後のイエスさまの十字架の死を指し示していると理解してよいでしょう。神さまから離れ罪の中に迷い出たわたしたちをご自身の命をもってそこから贖い出し、罪の支配から買い戻してくださる。そのためにご自身を犠牲になさるのです。それが十字架の死であります。

実際に羊飼いは命を張って羊を守ることもあったと言われます。羊を生業としている羊飼いにとって、羊は貴重な財産です。外敵から必死に守ろうとするのは当然なのかもしれません。最近は熊の被害が相次いでいますが、もしそういう猛獣が襲って来たらそれこそ命がけです。また盗人から取り返す。それは危険を伴うことでしょう。でも危険をかえりみず、命を張って羊を守る。それが良い羊飼いなのです。それほどに本気で、真剣にわたしたちと向き合ってくださる。そのように誰かや何かと本気で向き合うことがありますか。ある教会での話、受洗志願

者が牧師に「わたしは本気です」と言った。でも牧師は「あなたが本気なのはわかる。けれどもあなた以上に神さまが本気であることを忘れてはいけない」と。神さまは本気で、命を張ってわたしたちを罪の中から取り戻してくださる。イエスさまが十字架で死んでくださったのには、そういう意味があります。

今日のところで一つどうしても気になる御言葉があります。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」（１６節）この「囲いに入っていないほかの羊」とは何を指しているのでしょうか。一つには、ユダヤ人以外の異邦人を意味していると理解することができます。今、祈祷会では使徒言行録を読んでおりますが、ちょうどパウロがヨーロッパに渡りまして、アテネやコリントへ異邦人伝道に向かって行くところを読んでいます。神さまの救いはユダヤ人に限定されていない。全世界に及んでいきました。イエスさまが弟子たちを派遣して「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ１６：１５）とおっしゃったように、福音は世界中に宣べ伝えられていきました。遠いわたしたちの国にも福音は伝わってきました。わたしたちも本来は「囲いに入っていないほかの羊」ですが、そこにも羊飼いの思いは届いているのです。「その羊をも導かなければならない」と。

先週は葬儀がありました。合志豊岡伝道所の古い教会員の方が天に召されました。松木治三郎牧師の時代に坪井教会で洗礼を受けた方です。久しぶりの大きな葬儀でした。おそらくはキリスト教の葬儀が初めての方々ばかりです。初めて聖書の話を聞く。初めて讃美歌を歌う。改めて思いましたのは、葬儀は本当に良い伝道の機会だということです。それこそ人間の生き死に関わるところです。死の現実に直面して悲しみ、多くの人は考えるのです。自分は死んだらどうなるのか。どこに行くのか。けれどもそこに神さまの御言葉が告げられる。「わたしの父の家には住むところがたくさんある」（１４：２）と。そういう慰めを人々は必要としています。パウロがコリントで伝道したときも幻の中でイエスさまが「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」（使徒言行録１８：９～１０）とおっしゃいました。まだ囲いに入っていないわたしの民、わたしの羊がいるのです。その羊をもイエスさまは導いておられる。その働きに教会は仕えていくのです。

「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」（１６節）これはイエスさまを頭とした教会です。使徒信条で「聖なる公同の教会を信ず」と告白します。わたしたちはただ目に見える地上の教会員になっているだけではありません。一人の羊飼いであるイエスさまに導かれて、一つの群れ、一つの神の民としての教会を作っています。世界中の人々がそのようにイエスさまに導かれ一つの囲いの中に入るのです。国境を超え、人種を超えて、イエスさまによって一つに結ばれる、壮大な救いがそこにあります。

天の父よ。自らあなたのもとを迷い出たわたしたちを本気で、命がけであなたは探し出してくださいます。そのために十字架で命を捨ててくださいました。その恵みに少しでもお応えできますように。主の御名によって祈ります。アーメン。